

## ホロコーストの記憶

### *The Message to the Planet* を読む

榎本 眞理子

#### . Introduction

アイリス・マードックの最後から3番目の小説 *The Message to the Planet* (以下 *The Message* と略記) はこれまで比較的論じられることの少なかったテキストである。しかしマードックの小説に登場してしばしば重要な役を果たすユダヤ人について考察する上でも、また現代における善と悪の問題を考える上でも、*The Message* はきわめて重要なテキストであるといえるだろう。なぜならこのテキストの中心的人物 Marcus Vallar はユダヤ人であり、ホロコーストの悪夢にとりつかれているからである。このテキストは主に二つの筋からなっている。一つは天才的数学者で思想家のマーカスを中心とする話、もう一つは売れっ子の画家 Jack Sheerwater と妻 Franca, 不倫相手の Alison をめぐる話である。

本論文では主筋にあたる一つ目の話をとりあげ、テキストの核心に迫っていく<sup>(1)</sup>。それを通じて、マードックが *The Message* でも現代における神の問題を取り上げていることを確認していく。即ち我々現代人は人格化された神を求めるのではなく、一人一人の心の中にこそ神を求めるべきであり、それは自分の固定観念や思いこみをおしつけることなしに他者を大切にすること、他人へのささやかな善行のうちに表現されるのであり、どんなに地味であろうとそれこそが悪に対抗する唯一の道である、ということをマードックは読者に訴えかけているのである。

## . *The Message* の世界

### 1. あらすじ

まずごく簡単にこの小説のあらすじを紹介しよう。

Gildas Herne, Alfred Ludens, ジャックの3人がギルダスのフラットに集まって、原因不明の病で死にかけている Patrick Fenman のことを話している。パトリックが病気になったのは、マーカスに呪いをかけられたからだと言われている。マーカスは、かつてケンブリッジで知らない人はいないほどの天才の数学者であった。ところがそのうち数学をやめて画家修業を始めたマーカスは、ジャックのもとに学生としてやってきたのである。マーカスはマードックの小説にしばしば登場する enchanter の系譜に属す人物である。割合冷酷で遠慮会釈なくまわりの人を鋭く批判し、傷つける。それでいて不思議な魅力の持ち主で、皆なんとはなしに引きつけられるのである。

ルーデンス<sup>(2)</sup>はマーカスが、「人間の意識とは」、「この世で善は可能か」といった究極的な問いの答えを知っていて教えてくれるのではないかと考えている。また死にかけたパトリックをマーカスなら救えるのではないかと思っている。やがてルーデンスはマーカスを探し出し、彼と娘の Irina をロンドンに連れて帰る。マーカスはパトリックに蘇生術を施す。すると奇跡的にもパトリックは意識を取り戻し、「死の淵からよみがえった」のである。

その後イリーナはソールズベリー近くのベルメインというところに家を見つけ、二人はそこへ引っ越すことになる。ところがルーデンスが二人を車に乗せて行ってみるとそこは精神を病んだ人たちのための高級療養所のようなところであった。ルーデンスは怒り狂うが、イリーナは「お父さんは病んでいて、治療が必要なのだし、私はお父さんの世話だけに明け暮れるのにはいやになった」と譲らない。マーカスその人も、ベルメインでの生活を楽しみ、そこを出て行こうというルーデンスに耳を貸さない。ルーデンスは仕方なく近くの村に部屋を借り、日に数度彼らを訪問するようになる。ルーデンスは次第にイリーナを愛するようになり、二人はやがて結婚の約束をする。

死者を蘇らせた人がいる、という噂が広まり、人々がマーカスに会いに来

るようになる。それが高じて毎日マーカスはまるで聖人が神であるかのように、ベランダに立って集まった人々に顔を見せる。ところがある日マーカスは「こんなことはやめるべきだ、自分は人を欺いている」と言ってそれをやめてしまう。

マーカスはユダヤ人であるが、彼も家族も強制収容所に入れられたことはないし、そこで死んだ親類もない。それにもかかわらず彼はホロコーストの悪夢にとりつかれている。彼は悪や究極的な苦しみなどについて常に思いめぐらしていたが、ついには自殺してしまう。遺産の手続きのためにロンドンに出かけていったイリーナは、ルーデンスの前から姿を消す。彼女は前に住んでいた Red Cottage の以前の持ち主の息子である貴族と婚約していたことが分かる。こうしてルーデンスは精神的な父と婚約者の二人を失ったのである。

そして「自分を立て直」すため、「誰も知った人のいない海辺のホテルに行き、人なつこい犬と出会ったり、海辺を散歩してきれいな貝殻を拾ったりしたい。それにしても、我が師マーカスはどうして死んでしまったのだ」とルーデンスは心の中でつぶやくのであった。

## 2 . マーカスとルーデンス

### ( 1 ) マーカス

*The Message* についての批評の中には、「キリストが現代に出現したらどんなふうか。それを描いたのがマーカスだ」というコメントすらある<sup>(3)</sup>。勿論マーカスは決してイエス・キリストではない。救世主コンプレックスにとりつかれ、自ら「救世主になりたい」と望んでいる人である。マーカスはルーデンスに向かって、たとえば次のように言う。

“It may be, I say it *may* be, that the Jews are once more called to make an utterance to mankind, to manifest, for a new age, a new holiness and a new divinity. Our ancient wisdom is stirred to speech. We have seen and suffered the sign of world change. Because we are

homeless, because we are outcasts, beggars, nomads, victims, we are called to witness, to represent the state of man upon the planet. (166)

ユダヤ人は放浪者で犠牲者だからこそ、今ひとたび人類を救う役を果たすことを要請されている、というのがマーカスの主張である。マーカスは、人類に奉仕したい、人類を救いたいと考えていたのである。これに対してルーデンスは、「神は死んだというのが一番重要なことで、だから我々はお互いに助け合わなければ」(166)と反論する。

マーカスはカリスマ的人物で、皆一時は彼に心酔する。娘のイリーナに言わせれば彼は誇大妄想にとりつかれているにすぎない、ということになってしまうが、決してそれだけではない。彼が大変大きな精神的パワーの持ち主で、人をいやす力を持っているのも事実である。それだからこそ彼は、人間の心の悪、恐ろしい深淵ものぞきこむことになるのである。マーカスは「ホロコーストを行った人々を理解するには自分の中の悪を活性化させなければならぬ」と主張する。彼のこの言葉は、実は Primo Levi の「おそらくああした出来事 [ ナチスによるユダヤ人迫害や虐殺 ] は理解できないもの、理解してはいけないものなのだろう。……『理解する』とは……自らをその [ 人の ] 位置に置き、その実行者と同一化することを意味する」(244) という言葉を思い出させる。マーカスはさらに「悪を許すことができるのも、理解できるのも神だけだ」と言う。彼は常人には不可能なこと、つまり自分の内なる悪を活性化させることによって、悪とは何かを本当の意味で理解しようとしているのである。これを聞いてルーデンスは、そういうことを「ぜひ本 (work) にまとめてください」と言う。マーカスはそれに対して「自分の考える work は本などではなくて、自分自身を生け贄として捧げることなのだ」(443) と答えるのであった。

もう少し冷静な第三者の目として、ベルメインの持ち主で精神科医である Marzillian の言葉を引用しよう。「心を病んでいる人は、普通の人間なら上手に自分から隠して気づかずにすませる、生きること自体にまつわる不安 (the sound of contingency itself) に気がつくのだ」、また心の敏感な人も

同じことである(263)と、彼は言う。マーツィリアンはまた、「マーカスは気が狂っていたわけではなくて、一種の天才で、普通の人間なら対決できないような、不可解な心の力に立ち向かえたのだ」(497)と、彼の死後に分析する。

マーカスのおかげで「死の淵から甦った」パトリックは「あらゆる罪と悪と人間の悲惨な姿を見て、なおかつ狂わずにいられるのは、神だけ」であり、「無実の人々の血と涙は常に流れ続けている、そういう地球と他の星とあらゆる銀河系宇宙と、つまり全宇宙を神は現に見て」いる(436)、そしてマーカスはそういう神のようなことをしようとしているのだと言う。またマーカスが自殺した後マーツィリアンは、ホロコーストを生き延びてきた人たちが、罪の意識からしばしば自殺したりすると、次のように述べる。

Survivors from those camps tell us that they feel terrible guilt and shame...so much so that some of them committed suicide just after being liberated, and some did so many years later....How are we to judge even those who quietly, readily gave in, co-operated, became the tormentors of their fellows? And even the courageous ones, the pure ones who at risk to themselves gave aid and comfort to others, can say later that they might have done more, and will think all their lives of some small good act which they failed to perform. (498-499)

プリーモ・レーヴィが恐らくそうであったように、マーカスの自殺は、ホロコーストでたくさんのユダヤ人が死んだのに「自分は死ななかつた」という罪の意識も大きな原因のひとつであろう。

またこのような罪の意識は、ごく普通の、仲の良い　ということはケンカもすればいつくしみあいもする、ということだが　家族や友人などに先立たれたときに、ほとんどすべての人間が心の底から感じることもある<sup>(4)</sup>。その意味で、この罪の意識は決してホロコーストを生き延びた人だけのものではない。

## (2) ルーデンス

マーカスと同じくユダヤ人であるルーデンスは、「マーカスは天才で、彼からきくと究極的な問いの答えを引き出せる」と思い、その期待をマーカスに押しつけ、本を書いてくれとうるさくせがみ続ける。マーカスにはそれが重荷であった。

ルーデンスはマーカス、イリーナ親子を世話し、彼らとつきあう中で家庭的な幸せを味わうようになる。家庭的にあまり恵まれなかった独身のルーデンスにとってそれは珍しいものであった。当然のことではあるが、ルーデンスがマーカスと本当に親しくなれたのは、「本を書け」と要請するのをルーデンスがやめてからである。

イリーナについては、最初のうちルーデンスは殆ど興味を示さないが、イリーナと親しくなればマーカスにももっと大きな影響力を持てるのではないかと考え、またマーカスから、「面倒をみてやってくれ」と、結婚してやってほしいと暗に仄めかされたせいもあってイリーナに興味を持ち始める。そして次第に本当に彼女を愛するようになり、そのワイルドでエキセントリックで、ジブシーを思わせるようなところも含め、彼女のすべてを愛し、美しいと思うようになる。これはルーデンスの成長を表すといっていいただろう。しかしうまく行かない。彼はイリーナについても、分かっているようで、結局ほとんど何も分かっていないのである。

ルーデンスはマーカスを心から慕っていたにもかかわらず、前述したように、彼の叡智が自分を救ってくれるという思いこみがあったために、マーカスその人を大切に損なっている面がある。「パターンを押しつけてはいけない」と言いつつ、自分には押しつけているではないか、とマーカスその人に指摘されるほど、それは目に明らかであった。またルーデンスは肝心なときにいつも何か他のことに心を奪われていて目の前の状況に対して適切な反応が出来ないことも注目に値する。

晩年のマーカスの人生でルーデンスが果たした役割については、例えばマーカスの次の言葉が雄弁に物語っている。

You know, Alfred, you have played a part too you took me away from Red Cottage, you led me to Pat. Then you forced me to make some final attempt to collect all my thoughts together, you *taught* me my thoughts, all my old thoughts, you rehearsed them and set them in order as it were pointing toward the hidden conclusion which you wanted me to reach. (342)

ルーデンスはマーカスに、彼がかつて抱いていた諸々の思想を思い起こさせ、口にし、整理し、その上で彼が結論に到達することを可能にさせた、というのである。マーカスはルーデンスに促され、ルーデンスの予測とは全く異なる独自の道を歩んでいったのである。それがマーカスなりの唯一の自己実現<sup>(5)</sup>の道であったのだろう。例えその「隠された」結論が、ルーデンスの期待していた、偉大な哲学的書物をまとめることではなく、人類を救うため、贖罪のいけにえとして自分を差し出すことであったにしても、彼はマーカスが自分の考えをまとめるのを助けたことになる。

### (3) 救い

もう一度マーカスに話を戻そう。マーカスが救世主コンプレックスにとりつかれているのも事実ではあるが、その動機は決して利己的な名誉心や野心などではなく、純粋なものである。また人々の求めに応じてパトリックの命を救い、人々をいやし、‘the nicest uncle’ として、‘Stone People’ とか ‘the Seekers’ と呼ばれる、ヒッピーのような、マーカスを師と慕う若者達に「家に戻って学校に行きなさい」と現実的なアドバイスを与えもする。彼はそのようにして人々に心身の救いを与えたのである。だがマーツィリアンも言うように、彼は ‘psychical genius’ , 一種の天才である。ではもっと普通の人間にも可能な普通のレベルの救いについてはどうかというと、次のように描かれている。‘...the occasion, is always there, as soon as you open your eyes, and everything you do it can be art!’ (267) これは絵を描くことについて述べられた文であるが、「目を開きさえすればチャンスはどこに

でもある」という言葉は、マードックの言う善についても当てはまるといえよう。似たような言葉が他にもテキストのあちこちに出てくるのである<sup>(6)</sup>。

## ・マーカスのモデル

### 1 . Keisel , Steiner , Momigliano , そして Levi

Peter Conradi によればマーカスには4人のモデルがいる。Georg Kreisler , Franz Baermann Steiner , Arnold Momigliano , Primo Levi である (Conradi 560) 。このうちはじめの三人はマードックの人生に直接関わりのあった人たちである。プリーモ・レーヴィはどうか。コンラディは、まるでマードックが「1987年4月のレーヴィの自殺を予知しているかのように見える」と述べ、更に脚注では“*Iris wrote to Sister Marian from 30 Charlbury Road, undated: 'I too read Primo Levi's book and before his death, wrote in one of my books about such a death of someone, years later, who had been haunted by the Holocaust'*”<sup>(7)</sup> (Conradi 560) と書いている。マードックはレーヴィが現実の世界で自殺するのに先だって小説中のマーカスの自殺を書いているというのである。このことは、先に引用した箇所描かれている「罪の意識」が、ホロコーストを生き延びた多くの人々に共通のものだったこと、またそれをマードックが正確に見抜いていたことを意味するといえよう。

プリーモ・レーヴィは1943年の4月にアウシュビッツに収容されたが、奇跡的に生還した、イタリアの作家である。前述の『アウシュビッツは終わらない』で高い評価を受け、他にも多くの著作を残したが、『溺れるものと救われるもの』を出した翌年の1987年、原因不明の自殺を遂げ、世界中に波紋を巻き起こした。

### 2 . 『アウシュビッツは終わらない』

『アウシュビッツは終わらない』には、まるでマードックの *The Messages* と響きあうかのような箇所が見える。以下、それを見ていこう。

レーヴィは、ヒットラーやムツリーニは「人を魅き付ける秘密の力」を



持った「カリスマ的な頭領」だったと言う。しかし問題は彼らにひき付けられた何万もの信者、「普通の人間」がいたことだった。レーヴィは「カリスマ的人物に頼ってはいけない。例えどんなに輝かしく見えようともカリスマの『預言』を信じてはいけない。自分で考え、判断することを人に委ねてはいけない。例えどんなに地味に見え、時間がかかろうとも常に自分で考え、自分で判断しなければならない」と言っている<sup>(8)</sup>。

ナチスのホロコーストの恐ろしさは、それがアドルフ・ヒトラーという一人の人間の罪に帰することができないところにある。ヒトラーを信じ、追隨した人々がいなければ何百万もの人々が殺されることはなかったであろう。つまり恐ろしいのはふつうの善意の人間がホロコーストを行う側に加担したところにこそある。暖かい心と人間味を持ち合わせた善良なごくふつうの人々、つまり我々ひとりひとりの中にあるささやかな悪が、巨大な悪の企みにまきこまれたとき、悲劇が起こったのであり、そのようなことはまた起こりうるのである（レーヴィ 244）。我々が、輝かしい預言やカリスマ的人物に頼って、自分で考え、判断することをやめてはいけないのは、そのためなのである。

『アウシュビッツは終わらない』の中ではごく普通の個人の中に潜む悪は、次のようなかたちでも描き出されている。強制収容所に入れられた者同士なら助け合うはずだと我々は常識的に判断する。しかしそれは人間がまともに扱われた場合の話である。名前はおろか、衣服や靴まで奪われ、寝ている間はもちろんのこと、シャワーを浴びるわずかな時間にすらうっかりすれば穴の空いた古いシャツや、左右別々の靴などわずかな所持品すら盗まれてしまうという状況に人々は常日頃暮らしていた。だから人々は小さくまとめた所持品を持ったままシャワーを浴びたし、足の間にしっかりと荷物をはさんで眠った。誰も、何とか少しでも多くものを手に入れ、生き延びようと必死に毎日を過ごした。そのような中では人間は生き延びるためにあらゆる手段を講じる。普通の意味での人間性はすべて剥奪されてしまうこととなる。つまり収容所に入れられている人間を抑圧するのはナチス側の人間だけではないのである。まともな生活をしていれば助け合うはずの、収容された

人同士、いわば仲間同士が互いにものを盗んだり、痛めつけあったりする。これが、恐らく強制収容所で生活をした人でない限り、あるいはそこから奇跡的に生還した人たちから話を聞かない限り分らない、強制収容所の恐ろしさであろう。

プリーモ・レーヴィが最初の著作『アウシュビッツは終わらない』でも、最後の『溺れるものと救われるもの』でも一貫して訴えていることのひとつは、先述のように、人はカリスマに頼ってはいけない、自分でものを考えなければならない、ということである。マードックが *The Message to the Planet* でマーカスとルーデンスという人物を通して訴えかけているのもまた、enchanter に依存することなく自分でものを見、自分でものを考えよ、ということではないかと思われる。

### 3. 救いはどこに

先ほど紹介した、強制収容所内の生活には、勿論例外もある。運良く友人と仕事のペアになったり、また新たな友人が出来れば、助け合うことも可能である。さらに、収容所に出入りしている民間人が何の見返りも求めず色々と便宜を図ってくれたりすることもあったようである。それに関してプリーモ・レーヴィを引用しよう。

今日私が生きているのは、本当にロレンツォのおかげなのだ。物質的な援助だけではない。彼が存在することが、つまり気どらず淡々と好意を示してくれた彼の態度が、外にはまだ正しい世界があり、純粹で、完全で、墮落せず、野獣化せず、憎しみと恐怖に無縁な人や物があることを、いつも思い出させてくれたからだ。それは何か、はっきり定義するのは難しいのだが、いつか善を実現できるのではないか、そのためには生き抜かなければ、という遠い予感のようなものだった。(149)

カリスマ的人物に頼ることの危険、そして私たちひとりひとりのうちに潜む悪の認識、またそれにもかかわらず確固としてある善の存在への確信、ま

た善は何か輝かしい大事業などではなくて日常生活の中のささやかな善意のうちこそあるという認識　これらは奇しくもマードックとレーヴィに共通して見られる。それはマードックがレーヴィの本を読んで影響を受けたという単純なことではなく、それぞれ境遇は違うものの、ホロコーストに端的に表れている人間の悪を真剣に考察し、またそのような巨大な悪に直面して人間に救いはありうるのかを真摯に考察していった結果、この二人がほぼ同様な結論に達したためと考えた方が正確だろうと思われる。

少し本題をはずれるが、ホロコーストに関わったり、またその悲劇を描いた他の作家や思想家に目を転じてみよう。ホロコーストの影響の悲劇を描いたカナダの作家 Anne Michaels はインタビューで「私達はささやかな愛の行為がもつ力を忘れている。それがどんなに強力を忘れている。歴史や経済の動きなどといった大きな力の前で、私たちはしばしば絶望的な気持ちになる。しかし実際に、個々人のささやかな行為が信じられないくらい大きな力を持ちうるのである」<sup>(9)</sup>と述べている。またアメリカの作家 Kurt Vonnegut は、ナチスの二重スパイを主人公にした *Mother Night* の中で「悪とは何か。それは誰の心にもある、際限なく人を憎悪しようとする、神を味方につけて人を憎悪しようとする欲望のことだ」(181)と言っている。ヴォネガットは、人間がおのおの自分達の信奉する価値観や宗教のみを絶対視する限り、地上に平和は訪れないのであって、decency（まともさ、他人を愛と尊敬をもって扱うこと）こそが、他人へのささやかな善行が重要なのであると主張する<sup>(10)</sup>。またベンヤミンは「歴史の中の死者の叫び　それも勝者ではなく敗者の　を聴く能力を持つこと。可能性を出さずに死んだもの／出来事／事物たちーの哀悼の作業、喪に服することこそ、まずは歴史認識の努め」であると。これについて今村仁司は「これによって人間の上にもささやかな希望の光が差す。なぜならそれこそは暴力無き世界、支配なき世界への第一歩だからである」と解説している。(124, 128 - 129) これらの作家や思想家達も、マードックやレーヴィと似た主張をしていることは大変興味深いことであると思われる。マードックはナチスと戦う人々に共感し、それは人間に善が可能だという証拠だと述べているのである<sup>(11)</sup>。また友人

であったパウル・ティリッヒに共感し、人はおのおのの心のうちにこそ神を求め、実現すべきであるとした<sup>(12)</sup>。

・ *The Message to the Planet* の message

最後に今ひとたび *The Message* のメッセージに目を向けてみよう。これまで触れてこなかったが、このテキストの中では石が様々な意味を担っている。そのひとつは Axle Stone と呼ばれる巨大な石である。マークスの入る療養施設ベルメインはソールズベリーの近くに設定されている。ストーンピープルはストーンヘンジをあげめ、しばしばストーンヘンジ詣でをする。アクスルストーンもどうやら巨石文明のなごりらしい。この巨石のある場所は一種の神聖な場所であり、色々な出来事の舞台にもなっている。巨石があることで、その場所は人々に影響し、心を浄化するのである。西洋人のなくしてしまった 'concept of holiness' をインド人は今でも持っていて、「彼らは目に見え、手で触れられる神聖なもの、神聖な場所、神聖な人を探し出して心から敬う」(355) とマードックは脇役のひとりに言わせている。その意味でアクスルストーンは、あらゆる空間は等質であるとする近代的なものの見方、現代西洋文明への批判を象徴していると言えよう。

「神は遍在する」という概念をもっと徹底して表すのが、アクスルストーンやマークスへの「捧げもの」として花と共に使われる、美しい小石である。まるで命と人格すら備えたような小石は次の *The Green Knight* でも盛んに登場するのだが、*The Message* でも何度か登場する。マークスを崇拜する少女に小石をもらったルーデンスははじめは馬鹿にするのだが、次第にそれを大切にするようになる。もうひとつ小石を拾おうとして、ポケットに入っているもらった小石と争う様子を想像して、ばかばかしいとは思いつつも、拾うのをやめるのである。

マードックの小説世界では、「どんなものでも本気であがめれば神聖なものになる」(322) という考え方は、単純なアニミズムというよりむしろ、個々人の精神のありようの大切さへの注目につながることである。マードック自身が *The Message* 中ではっきり 'we need a new god...as any human

must become'(165)と述べているように、それは形をもった、人の姿の神ではなくて、ひとりひとりの心のうちに神の存在を待つことである。日々の暮らしの中でささやかな善行を積み重ねていくことである<sup>(13)</sup>。

この「精神的なことの大切さ」への注目は、もうひとりのマーカス、『自省録』の著者マルクス・アウレリウスをも我々に思い出させる。あらゆる苦難の中にあっても、心の平静さえ保てれば人間は幸せであることが可能である、とするこの賢人の思想は、どこかでマードックの思想ともつながってくる。マードックがヴァラーの名前として「マーカス」を採用するに当たっては、ことによるとマルクス・アウレリウスの思想も念頭にあったのかもしれないと思われる。

最後に、淡々と行為を示してくれたロレンツォの態度に対するレーヴィの言葉と、ルーデンスの言葉を再度引用して本論文を閉じることにしよう。

それは何か、はっきり定義するのは難しいのだが、いつか善を実現できるのではないか、そのためには生き抜かなければ、という遠い予感のようなものだった。(レーヴィ 149)

神は死んだ、というのが一番重要なことで、だからこそ我々はお互いに助け合わなければならないのです。(166)

使用 Text : Murdoch, Iris. *The Message to the Planet*. 1989. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1990. (文中の数字は頁数を表す。)

注

- (1) 本稿は第五回日本アイリス・マードック学会(2003年10月18日)に於いて発表した原稿に加筆修正したものである。
- (2) なぜか彼だけは family name で呼ばれるので、この小論ではそれにならう。

- ( 3 ) ‘All customer reviews’ of <http://www.amazon.com> より。
- ( 4 ) Klitzman 参照
- ( 5 ) ヨング心理学的な意味での「自己実現」である。人は他人にいくら「よりよい生き方」、「正しい生き方」を示されようと、自分なりの狂い方をするものであると心理学者はいう。
- ( 6 ) 355, 322など。
- ( 7 ) あくまでも推測に過ぎないが、レーヴィの本を一冊だけ読んだとすれば、代表作の『アウシュビッツは終わらない』の可能性が大きいのではないかと思われる。もう一冊考えられるとすれば最後の『溺れるものと救われるもの』だが、英語版が出たのは1988年である。但しマードックがイタリア語版で読んだとすれば話は別だが。
- ( 8 ) レーヴィ 245, 但し要約である。
- ( 9 ) ‘real : interviews Anne Michaels’ 参照。
- ( 10 ) 拙論 1985参照。
- ( 11 ) Conradi 341-342.
- ( 12 ) 紙面の都合で詳しくは論じられないが、マードックに大きな影響を与えたパウル・ティリッヒは、神学を今日の様々な問題と結びつけようとした。彼は又いわばナチスの出現を予測していたという。岩村参照。
- ( 13 ) アン・マイケルズは悪の存在証明は一回の悪行ですむが、善行は積み重ねるしかないと言う。拙論 2000参照。

#### 引証資料

Bloom, Harold. *Iris Murdoch*. New York : Chelsea House Publishers, 1986.

Conradi, Peter. ‘A Witness to Good and Evil.’ *The Guardian*, February 9, 1999.

\_\_\_\_\_. *Iris Murdoch : A Life*. London : Harper Collins, 2001.

Klitzman, Robert. ‘When Grief Holds of the Body.’ *New York Times*, September 10, 2002. ( 邦訳は拙稿2003参照 )

- Michaels, Anne. *The Fugitive Pieces*. London : Bloomsbury, 1998.
- Murdoch, Iris. *The Bell*. Frogmore, St. Albans : Triad/Panther Books, 1958.
- \_\_\_\_\_. *The Flight from the Enchanter*. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1956.
- \_\_\_\_\_. *Metaphysics as a Guide to Morals*. 1992. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1993.
- \_\_\_\_\_. *The Green Knight*. 1993. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1994.
- Nussbaum, Martha C. 'Love and Vision : Iris Murdoch on Eros and the Individual.' *Iris Murdoch and the Search for Human Goodness*. Ed. Maria Antonaccio and William Schweiker. Chicago : The University of Chicago Press, 1996. 138-168.
- 'real : interviews Anne Michaels' (<http://www3.bc.sympatico.ca/coho/michaels.html>).
- Spear, Hilda D. *Iris Murdoch*. London : Macmillan. 1995.
- Vonnegut, Kurt. *Mother Night*. 1961. New York : Dell Publishing Co., Inc. 1983.
- 井藤千穂「アイリス・マードックにおけるユダヤ人 *The Green Knight* における非神話化とその意味」『藝文研究』74号 1998。
- 今村仁司『ベンヤミンの問い』講談社 1995。
- 岩村太郎「ティリッヒ神学の批判的継承と発展」『哲学』第108集 2002。
- 榎本真理子「カート・ヴォネガットの世界」『津田塾大学紀要』No. 17. 1985。
- 同上「子供たちへのメッセージ アン・マイケルズ『うたかたの調べ』」『イギリス女性作家の半世紀 第5巻 90年代・女が拓く』宮沢邦子編 勁草書房 2000。
- 同上「もう一つの白鳥の歌 *The Green Knight* を読む」『恵泉女学園大学人文学部紀要』2001。
- 同上「ロバート・クリッツマンの仕事から 『夜の一年』, 『夢とガラスの

館にて』, および「悲しみに身が苛まれるとき」『文学研究』第30号  
2003。

平井杏子『アイリス・マードック』彩流社 1995。

レーヴィ, プリーモ『アウシュビッツは終わらない』朝日新聞社 1980。